



ひょうご人権ジャーナル

KIZUNA

きずな

特集“多文化共生”

多様性を力に

INDEX

- 2 外国にルーツを持つ人から見た、日本の多文化共生
南越 家雨さん(兵庫県立姫路南高等学校 教諭)
- 3 多文化共生社会の可能性
—誰も排除されない社会へ—
吉富 志津代さん
(名古屋外国語大学世界共生学部 教授
NPO法人多言語センターFACIL 理事長)
- 4 多文化共生社会を作る
「お互いさま」の気持ち
庵 功雄さん(一橋大学国際教育センター 教授)
平成28年度「外国人住民調査報告書」
- 5 体験を共有し合うことにより、
共感のある多文化共生交流をめざして
神戸クロスカルチュラルセンター(神戸市)
- 6 「海外では／外国では」という語り口
結城 恵さん
(群馬大学 大学教育・学生支援機構大学教育センター 教授)
- 7 きずなTOPIC「少年院出院者の人権」
君の笑顔に会いたくて
大沼 えり子さん(認定NPO法人 ロージーヘル 理事長)
- 8 情報ぷらざ



在留外国人や海外からの旅行者の増加、東京オリンピック・パラリンピック2020の開催などを受けて、多文化共生社会の実現に向けた取り組みが進められています。しかし、外国人に対する偏見、誤解や摩擦等の「こころの壁」の解消には課題が残っています。

本号では、日本人と外国人がお互いに理解し、共に支え合うことにより、一人ひとりがいきいきと暮らせる多文化共生社会について考えてみましょう。



Profile

1987(昭和62)年10月に、ベトナム難民二世として姫路市で生まれる(出生名はグエン・ドアン・ギャブ)。横浜市のサレジオ学院中学校・高等学校へ進学。高校2年夏に、市立姫路高校へ転学。岡山大学理学部数学科卒業。2010(平成22)年から県立高等学校に勤め、現在は数学教諭として県立姫路南高等学校に勤務。2017(平成29)年日本国籍取得。

私が
思うこと

外国にルーツを持つ人から見た、 日本の多文化共生

現在、県立姫路南高等学校で数学の教諭として働いています。
ベトナムにルーツを持つこともあって、職場や講演会などで次のような質問をよく

私の両親はベトナム戦争終結後、小船に乗ってベトナムを離れました。フィリピンを目指していたのですが、途中でエンジンがかからなくなり、海の上を漂流していたそうです。食料が尽きてから数日後、日本の石油タンカーが偶然にも通りかかり、救助されたと聞いています。

両親は日本で生きていくことを決め、「自分たちの子どもには恵まれた生活をして欲しい」と、私たちを熱心に育ててくれました。そのおかげで私は大学を卒業することができ、

されます。

「日本は、外国にルーツを持つ人たちが活躍しながら生活できる社会だと思いませんか？」

私は自信を持って「はい、思います」と答えます。私自身が公立高校の教員として働いているというのがあります。私の周囲の外国籍の方たちも日本人と同じレベルで活躍できているように思うからです。

しかし、講演などで在留外国人の話を聞く機会が増え、「私たちのような例はほんの一部である」という意識を持つようになりました。

「日本語がわからず、自身の能力を伸ばすための授業を満足に受けられない」など、いろいろな例を聞き、言葉の壁は高いと感じました。現実としてほとんどの場合、働く上で日本語能力は必須のスキルであり、学校活動では主として日本語を用います。

「日本人ですら日々の授業についていくのに必死であるのに、日本語がわからない状態で授業や行事などの学校活動に前向きに取り組めるだろうか」「言葉や文化の違いによって人間関係に問題が生じたりはしないだろうか」など、日本語を母語※としない生徒の学校生活について心配は尽きません。

私も人間関係に悩んだことがあります。多くの人と交流し、多様な意見を聞くことを通して、自分に自信を持ち、仕事に打ち込むことができるようになりました。

多様な文化的背景を持つ者たちが、お互いに認め合いながら地域社会を構成していくために、私の立場からどのようなことができるのか。とても難しく、悩ましい課題です。まずは、私のようにベトナムにルーツを持つ人間が、日本社会を構成する一員になっていることを、多くの人に知って欲しいと願っています。

※人が幼少期から自然に習得する言語

兵庫県立姫路南高等学校
教諭

みなこし 南越家雨さん

多文化共生社会の可能性 —誰も排除されない社会へ—

名古屋外国語大学世界共生学部 教授
NPO法人多言語センター F A C I L 理事長

よしとみ しづよ
吉富 志津代 さん

規則ありきの社会

先日、アメリカ合衆国で、乗客数が定員を超え、フライト運行上の保安という理由で、ベトナム系の男性が航空会社職員らにむりやり機内から引き摺り下ろされ、けがをする様子がニュースで流されました。三ノ宮駅でも、肩があたりた腹を立てて相手をホームへ突き飛ばし、危うく大事故になりかけたニュースも記憶に新しいです。このように、みんなが心に余裕が持てず時間に追われているような場面や、先に規則ありきで些細なことに憤り、誰かを責めてしまう場面をよく目にします。また、自分と無関係の人との接触を避ける傾向もあるように思います。

その規則を決める時にすべての人の意見がきちんと取り入れられたのかどうかは、忘れがちです。

もちろん人々が協調して暮らす社会では規則は大切です。しかし、重要なのは、地域の多様な住民一人ひとりの意見や考えを公平に聞いてできた心のこもった規則であるかどうか、多数決という原理を盾に「多数者」だけに有利なものになっていないかどうか、それを理由に誰かを排除していないかどうか、ということです。

完璧な規則はたぶん存在しないのだと思います。だからこそ、それをいつも考え直すというプロセスで、多様な人達が互いに理解でき共感でき納得します。様々な立場や考え方の人がいれば、混乱したりもめたり調整に時間がかかります。それでもそのプロセスで寛容性も身に

付き、社会が少しずつ成熟していくのです。

違いを可能性へ

「多文化共生」という言葉は、1995(平成7)年の阪神淡路大震災を契機に全国に広がりました。災害によって「被災者」となった人たちが、実に多様だという現実が見えたからです。同じ立場となつて、共に助け合わなければならない状況があつたのです。

この「多文化」をイメージするとき、多くの人は外国にルーツをもつ住民のことを思い浮かべると思いますが、しかし、そもそも人はひとりずつが少し違う文化を持ち、習慣も考え方も多様なのではないのでしょうか。

違いがわかりやすい外国ルーツの住民への視点は、「違い」にどのような可能性があるのかということ

とともに、自分の身近にいる人たちの違いに気づかせてくれ、多様な声に耳を傾け、折り合いを付けていく力をつけさせてくれるのだと思います。

それが、全ての人が人権を守られた「多文化共生社会」の実現につながります。そのような社会であれば、一時的に日本を訪れるお客さまにとっても居心地のよい社会となるはずですよ。

Profile

南米の在神戸領事館秘書を経て、1995(平成7)年の大震災後は、多言語環境の促進、外国ルーツの青少年育成をめざした市民団体を設立。外国人自助組織の自立支援活動にも従事し、これらを主な研究テーマとする。その他、エフエムわいわい代表理事、兵庫県長期ビジョン審議会委員、大阪大学特任准教授などを歴任。2017(平成29)年より名古屋外国語大学現職。



多文化共生社会を作る 「お互いさま」の気持ち

「橋大学国際教育センター」教授

庵功雄さん
いおり いさお

「区別」と「差別」は紙二重

「差別」が許されないことは言うまでもありません。しかし、「差別」意識は物事を「区別」して認識しようとする人間の基本的な特性に根ざしたものであり、容易に解消できないものなのです。

一つ例を挙げます。タイ人日本語学習者は母語(タイ語)の影響で「わたし」を「わたし」と発音することがあります。タイの日系企業の工場を視察した日本人関係者が、タイ人の責任者が「わたし」と発音したのを聞いて、「この人大丈夫か」と発言したことが伝えられています。これはたかだか子音一つの違い(区別)が「差別」を生んでいる例です。

もう一つ逆の例を挙げます。「さしすせそ(サ行)」を発音してみると、「し」の時だけ舌先の位置が異なります。つまり、サ行の子音は、「i」以外の母音の前では「s」なのに対し、

「i」の前では「j」(「しゃしゅしょ(シャ行)」の子音)になります。言い換えると、日本語には「s-i」と「j-i」の区別がないのです。そのため、日本人が意識せずに「シーシーズアシー(Shes sees a sea)」と発音すると、see(見る)とsea(海)がshe(彼女)になってしまいます。

こうした発音は、英語母語話者にとって日本人が感じる「わたし」以上に気持ち悪いだろうと思います。もし、sheとseaの「訛り」^{なま}だけで日本人が「差別」されたら、どれほど悔しい思いをするでしょうか。

差別を乗り越えるために 「お互いさま」の気持ちで

このように、「差別」意識はごくわずかな違い(区別)をあげつらいがちな人間の習性に由来しています。一方、「分かる」は「分ける」(区別)に由来するという説があるように、



「区別」は必ずしも悪いことではありません。問題は「自分と違う」(区別)ことを「相手は劣っている」(差別)と考えることです。「区別」を「差別」に結びつけないためには、相手を自分にはないものを持った人間と考える気持ちを持つことが必要です。それには、自分には相手の何かが気になっているのかを冷静に見つめる目を持つことが必要です。

※本文の内容の実践例については拙著『やさしい日本語―多文化共生社会へ―』(岩波新書)を参照ください。

Profile

1967(昭和42)年大阪府生まれ。大阪大学文学研究科博士課程修了。博士(文学)。2013(平成25)年より現職。専門は日本語教育、日本語学。著書は、「留学生と中学生・高校生のための日本史入門―信長から安保法制まで」(晃洋書房)、「新しい日本語学入門(第2版)」(スリーエーネットワーク)他多数。

平成28年度 「外国人住民調査報告書」

法務省は、昨年11月～12月に国内に在留する外国人を対象に人権状況を把握するための調査を初めて実施し、本年3月に調査結果を公表しました。

過去5年間に日本で、外国人であることを理由に侮辱されるなどの差別的なことを言われた経験がある人は、「よくある」(たまにある)を合わせて全体の約3割に上りました。

また、過去5年間に日本で住む家を探した経験のある人に質問(複数回答)をしたところ、「外国人であることを理由に入居を断られた」経験のある人は39.3%、「日本人の保証人がいないことを理由に入居を断られた」人は41.2%、「外国人お断り」と書かれた物件を見たので、あきらめた」人は26.8%でした。

体験を共有し合うことにより、 共感のある多文化共生交流をめざして

神戸クロスカルチュラルセンター(神戸市)



「神戸クロスカルチュラルセンター」は世界からの多文化の担い手である留学生と普段着の生活体験を共有し合い、人間的な共感を育みながら、多文化共生社会の実現をめざして活動しています。

地域の多文化共生の情報発信地として

神戸市には、居留地時代からの伝統もあり、実に多様な文化をもつ外国人が共生しています。特に若い留学生の多くは、多様な歴史や伝統、生活習慣に富んだアジア諸国から来日していますが、確かな目標意識をもって日々努力しています。アジアの国々には、日本語を流暢に話せるだけでなく、読み書きにも精通した優れた人材が多くいます。当センターは、「豊かさ」にスポイルされがちな日本の若い人達が、こうした多様に富むアジアの留学生達と共に汗を流すような体験を重ねて、人間的な共感を育み、多文化共生社会の実現に努力してほしいと願って活動しています。

センターでは、人間生活の根幹にある家族や家庭生活に、異質な文化を担う留学生を家族の一員として定期的に(毎月1〜2回、ホームビジット形式※)招き入れ、さまざまな体験を共有し合う「留学生とホストファミリーの交流」を、神戸、大阪、京都など関西を中心に、この37年間も継続、発展

させています。こうしたアジアからの留学生を受け入れてくださる市民に支えられてこそであり、今まで、世界60カ国を超える国々から留学生一万人以上が一万世帯のホストファミリー(留学生一人に対し、ホストファミリー一世帯)と交流できました。この取り組みが、国内最大規模の交流として評価され、文部科学大臣賞(1999(平成11)年)を受賞しました。

多文化共生社会に向けてのメッセージ

プログラムディレクターの住野和子さんは、「神戸市には在留外国人の方が多いですが、日本人の中には『個人的な付き合いは苦手』という方も少なくありません。私たちは、一緒に体験できる場をみなさんに積極的に斡旋し、多文化共生に向けての一人ひとりの意識改革に役立つ活動にこれからも取り組んでいきたい」と熱く語ってくださいました。

※家庭を訪問し、家族ぐるみで交歓し、普段着の家庭生活を体験すること

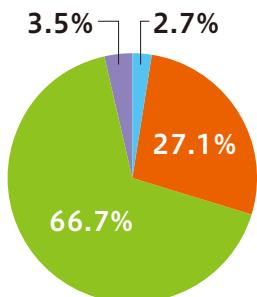


ホームビジット
プログラム対面
式の様子

神戸クロスカルチュラルセンター
〒653-0835
神戸市長田区細野町7丁目1-9
シューズプラザ4階
URL <http://kobeccc.com>

外国人であることを理由に
侮辱されるなどの
差別的なことを言われた

- よくある
- たまにある
- ない
- 無回答・不明



「外国人住民調査報告書」より作成
法務省ホームページ <http://www.moj.go.jp/JINKEN/>

さらに、日本に住む外国人を排除するなどの差別的なデモ、街頭宣伝活動をしているのを見たり、聞いた経験についての質問(複数回答)では、「直接見た」人は20.3%、「テレビ、新聞、雑誌等のメディアを通じて見聞きした」人は42.9%、「インターネットで見た」人が33.3%と、主にメディアで見聞きした経験者が多くいました。

調査結果の詳細は左記ホームページを参照してください。

「海外では／外国では」という語り口

群馬大学 大学教育・学生支援機構
大学教育センター 教授

結城 恵 さん
ゆうき めぐみ

「日本」対「外国」という図式

外国映画のある場面で日本人が登場し、そこで「日本人ってというのは、〜」とラベルが貼られるという場面に出くわしたことはないでしょうか。その場面が、日本人の行動を茶化したりしているものと、自分は別だと涼しい顔をしたくなったり、日本人へのラベルに、強い違和感を持つたりします。

現在、日本で暮らす外国人人数は約238万人※1。外国人数は年々増加傾向にあります。それでは、外国人のみなさんは、日本で「外国人」とラベルを貼られたり、それに対して違和感を持つたりする経験を重ねてはいないでしょうか。

私たちには一般に、「日本」対「外国」という図式で日本を意味づける傾向があるように思います。外国の事例を紹介すると、時に、たとえそれがひとつの国であったとしても、

しばしば、「海外では」という語り口になります。この「語り口」は、ひとたび気になりはじめると、テレビのコメンテーターの発言や著名人の講演会、一般の日常の会話の中にも、不思議なほど多用されていることに気づきます。

多様性に目を向ける

なぜ、私たちはそのような「語り口」になるのでしょうか。中根千枝氏が『タテ社会の人間関係』※2で指摘したように、日本の社会には、「ウチ」と「ソト」との関係性を意識し、「場」におけるふるまいや言葉づかいを調整する仕組みが存在するからなのかもしれません。

しかし、「海外」の人たちは、自分たちが一括りにされることに違和感を持つと言います。Foreigners（ガイジン）と呼ばれた途端、日本人との距離が遠くなり、自分を認めて

もらっていないという感覚を持ってしまうという困惑を耳にしたことがあります。

「海外」の人たちの国や言語・考え方・感じ方は多様です。その違いに目を向けると、それぞれの民族・宗教・家庭・人柄等に触れることができます。「海外」「外国」と一括りにするのではなく、その中にある多様性に興味関心を持ち、違いを尊重し、違いから知恵を頂く。そうした心構えで「海外」の人の間にある多様性に目を向けることも、「人類社会の全ての構成員の固有の尊厳」（世界人権宣言）につなぐため、私たちが日常生活のなかでできる実践ではないでしょうか。

※1 法務省「平成28年末現在における在留外国人数」
※2 中根千枝著『タテ社会の人間関係』（講談社現代新書 1967（昭和42年））

Profile

東京大学大学院教育学研究科博士課程修了。博士（教育学）。群馬大学にて、専任講師、助教授、准教授を経て、2009（平成21）年より現職。専門分野は、教育社会学。文化庁国語審議会日本語教育小委員会委員・地域日本語教育アドバイザー。留学生の就職促進、定住外国人が高齢期に備える日本語教室等、群馬大学の地域貢献事業を企画・運営責任者として牽引。



きずな TOPIC

少年院出院者の人権

君の笑顔に会いたくて

認定NPO法人
ロージーベル理事長
おおぬま
大沼えり子さん

少年院D

「えり子さん、俺、生きてていいんすよね。」
「えり子さん、俺、今、生まれて一番幸せっすー！」
あどけなさの残るこぼれんばかりの笑顔と
寸分の曇りもない輝く瞳。

2001(平成13)年11月、たった一つの笑
顔に会いたい、その一念から保護司の委嘱を
受け、少年院参観を期に、望まぬ環境の末に
非行に走った少年たちの心に小さな灯をと
もしたいと院内放送を制作し、少年院に贈
り始めました。番組にはリクエストと感謝
が、その裏側に隠れる助けてほしいという
想いが詰まったメッセージが届きます。

ある時ひとりの少年から、放送を聴いて
持った夢を叶え、必ず私たちにありがとう
を言いにくると約束する手紙が届きまし
た。しかし彼には帰る場所がないと言いま
す。私はこの時初めてそのような少年たちの
存在を知りました。

そこで2008(平成20)年にNPO法人
ロージーベルを発足、2011(平成23)年に
賃貸物件にてハウスを開所、家庭裁判所や

仙台保護観察所からの委託を受け少年た
ちの受け入れを始めたのです。

少年の家「ロージーハウス」

ハウスに入居する少年たちは笑ったこと
がないと言います。愛されることを知らず、
すさまじい虐待に耐え必死に生きて来た、
その生きる術が非行だということをどれだ
けの人が知っているでしょう。そんな少年た
ちが温かな家庭を体験し、関わるスタッフ
という家族を得て、「お帰り」と迎えられる
喜びを知り、笑うことを覚え、生まれて初め
て安住の地を見出します。そんな生き直し
の場所がロージーハウスなのです。

たった一つの笑顔に会うために

保護司、ハウス施設長を経験し、子どもた
ちは決して悪くはないと痛感する毎日。地
域と社会の理解、何より家族の愛があれば、
子どもたちはそれをこころの栄養にし、自
身が必要とされる存在であることを認識
し、他者にもその価値を見出すのです。私た
ちはそんな彼らを守り育て、「たった一つの笑
顔に会うために」これからも歩み続けて行
きたいと思っています。

Profile



大学在学中から、東京・仙台を中心に司会やシンガーソングライター、DJとして活躍。2001(平成13)年に保護司の委嘱を受ける。2008(平成20)年、NPO法人ロージーベルを設立(翌年より認定NPO法人)、代表を務める。著書は「子育てよかった物語」(学研パブリック)「この想いを伝えて…」(KKロングセラー)など。ロージーベル設立に至るまでの保護司としての歩みや経験を書き記した著書「君の笑顔に会いたくて」を原作とした同名の映画が9月公開予定。

URL <http://www.rosybell.jp/CCP031.html>

きずな映画館

ヒトラーへの 285枚の葉書



© X Filme Creative Pool GmbH / Master Movies /
Alone in Berlin Ltd / Pathé Production / Buffalo
Films 2016

監督:ヴァンサン・ペレーズ
出演:エマ・トンプソン、ブレンダン・グリーソン
英独仏合作、103分。
7月8日からシネ・リーブル神戸で公開。
お問合せは、シネ・リーブル神戸
078(334)2126

ここ数年の映画界では、ナチスやヒ
トラーをテーマにした作品が、以前に
も増して数多く制作されている気が
します。様々な角度、切り口から描か
れ、その視点は平和と自由に置かれて
いるようで、それほどに、それぞれの
作家(監督、制作者などの)現代への危
機意識が強いのかと思います。

この作品は、ベルリンでつましく暮
らす何の力も持たない職工夫婦を描
く、実話の映画化です。

オットーは、息子の戦死を機にヒト
ラーを批判するカードを書いて、公共
の場所にソツと置いてくるという活
動を始めます。その危険きわまりない
活動に対して、妻のアンナは夫の反対
を押して積極的に共犯関係を結びま
す。そのために、二人の絆がより深く
なり、息子を失った喪失感を共有す
る夫婦の物語ともなっています。

実際の効果はほとんど無いと思わ
れる行動ですが、人間の尊厳について
考えさせられます。ゲシュタポが支配
するベルリンの街の重苦しさ、映画
全体から漂って来ます。

犯人捜しをするゲシュタポの警部
も同時進行で描かれ、サスペンス映画
の趣もあります。

「ひょうご・ヒューマンフェスティバル 2017 in いたみ」を開催

テーマ

ひろげよう
こころのネットワーク

入場
無料

8月は「人権文化をすすめる県民運動」推進強調月間です。兵庫県では、市町と一体となって啓発活動を行っています。ご家族、ご友人とお誘い合わせの上、ぜひお越し下さい。

日時 8月26日(土) 10:15～15:30

場所 いたみホール(伊丹市立文化会館)

伊丹市宮ノ前1丁目1番3号 TEL 072(778)8788

アクセス 阪急伊丹駅から北へ徒歩約3分

JR伊丹駅から西へ徒歩約8分

問い合わせ (公財)兵庫県人権啓発協会

○詳細については、下記(欄外)までお問い合わせください。

内容

- 人権講演会「ありのままに生きたありは ありのままだった」
原田伸郎さん(タレント・ミュージシャン・墨遊家)
- ステージショー「それいけ! アンパンマン ショー」
- 地元高校・大学生によるふれあいステージ(ジャズ演奏・和太鼓演奏)
- 人権ユニバーサル事業
・ボッチャ ・スポーツ吹き矢 ・知的障害疑似体験
- 子ども多文化共生イベント
- 人権啓発映画上映

※他に、福祉団体による洋菓子・野菜等の販売など盛りだくさん。

EVENT GUIDE イベントガイド

イベント名 兵庫県 平成29年度外国人児童生徒にかかわる就学支援ガイダンス

日時・場所 7月22日(土) 14:00～16:00 神戸市総合教育センター※「神戸」駅、地下鉄海岸線「ハーバーランド」駅から徒歩約5分

7月28日(金) 13:30～16:00 三木市立教育センター※神戸電鉄「三木」駅から徒歩15分

内容 (1)就学及び高校入試に関する説明 (2)外国人の先輩による体験談

(3)教育相談 ア:面談により(事前申し込みが必要) イ:相談時間は1人30分を基本とします ウ:必要に応じて通訳を配置します

問い合わせ 兵庫県教育委員会事務局 人権教育課 子ども多文化共生センター(下記参照) TEL 0797(35)4537 FAX 0797(35)4538

イベント名 第64回 兵庫県人権教育研究大会淡路地区大会

日時・場所 7月29日(土) 受付12:00 開演12:25 淡路市立しづかホール※淡路交通高速バス・神姫高速バス「志筑」から徒歩5分

内容 講演「清河への道48番」講師 新井 英一(歌手)

朝鮮半島から日本に渡った父親の故郷「清河」を訪ねるところから始まり、自らが生きてきた人生を振り返りながら

これから生きていく道を確認していく叙事詩のような歌を全48番まで熱唱

問い合わせ 淡路市市民生活部人権推進課 TEL 0799(64)2521 FAX 0799(64)2565

※その他のイベント情報は、当協会ホームページ「研修会・イベント情報」をご覧ください。

ラジオ関西「谷五郎のこころにきくラジオ」(毎週月曜10:00～15:00)で、
14:35頃から「きずな」の記事を紹介しています。

子ども多文化共生教育の推進拠点 子ども多文化共生センター

「子ども多文化共生センター」は、すべての児童生徒が互いを尊重し合い、多様な文化的背景を持つ外国人児童生徒と、豊かに共生する真の国際化に向けた教育の取組や外国人児童生徒の自己実現の支援をコーディネートするなど、多文化共生社会の実現をめざす教育を推進するために活動しています。

外国人児童生徒等にかかわる教育についての相談は、お気軽にお問い合わせください。

- 利用時間 平日(月曜日～金曜日) 9:00～17:00
- 閉館日 土・日曜日、祝日、国民の休日、年末年始
- 教育相談 電話相談 閉館日の9:00～17:00
面接相談 予約制 ※必要に応じて通訳をご用意いたします。
メール相談 下記アドレスへ。

〒659-0031 芦屋市新浜町1-2(県立国際高等学校内)
TEL 0797(35)4537 FAX 0797(35)4538 MAIL mc-center@hyogo-c.ed.jp

HALF TIME

とある休日に大阪の街を歩いていると外国人観光客の多さに気づきました。実際、訪日外国人の数は、2016(平成28)年には、年間約2404万人に上ったというのですから、驚くことではないのかもしれませんが。最近の訪日外国人の観光スポットは、「桜の花見」「温泉めぐり」「神社・仏閣参拝」など、日本文化を好む傾向があるようです。同様に、私たちも異文化にふれる時、その国らしさを知り、感動し、その国の人の温かさ、さらなる興味をもつのだと思います。

多文化共生社会においても、「一人ひとりを大切に」という人権の基本を忘れず、異なる文化や歴史をもつ一人ひとりを理解し、お互いに認め合うことにつなげていくことが大切だと思います。(西村)

